

平成28年11月29日（火）

第11回定例教育委員会会議録

我孫子市教育委員会

1. 招集日時 平成28年11月29日(火)午後2時00分
2. 招集場所 教育委員会 大会議室
3. 出席委員 教育長 倉部 俊治 委 員 北嶋扶美子
委 員 豊島 秀範 委 員 長谷川浩子
委 員 足立 俊弘
4. 欠席委員 な し
5. 出席事務局職員
教育総務部長 小島茂明
生涯学習部長 小林信治
教育総務部次長兼総務課長 増田謙二
生涯学習部次長兼生涯学習センター長兼生涯学習課長 吉成正明
学校教育課長 吉川廣一
文化・スポーツ課長兼白樺文学館長兼杉村楚人冠記念館長 鈴木 肇
指導課長 大島慎一 鳥の博物館長 斉藤安行
図書館長 今井政良 教育研究所長 水戸勝英
生涯学習課主幹兼公民館長 少年センター長 羽場秀樹
丸山正晃 文化・スポーツ課主幹 小林由紀夫
教育総務課長補佐 森田康宏
6. 欠席事務局職員 な し

午後 2 時 0 0 分開会

○倉部教育長 ただいまから平成 2 8 年第 1 1 回定例教育委員会を開会いたします。

これより会議を始めますが、教育委員並びに事務局職員に申し上げます。我孫子市教育委員会会議規則第 1 8 条の規定により、会議で発言する場合は挙手をし、私が指名してから発言をお願いします。また、会議を円滑に進めるため、発言は一問一答をお願いします。

会議録署名委員指名

○倉部教育長 日程第 1、我孫子市教育委員会会議規則第 3 1 条の規定により、会議録署名委員を指名します。足立委員をお願いします。

諸 報 告

○倉部教育長 日程第 2、諸報告を議題といたします。

事前に配付された事務報告、事務進行予定資料等に補足する説明や追加する事項はありますか。

○大島指導課長 指導課のほうから、事務報告 5 ページ、5 番「我孫子市小中一貫教育布佐中学校区公開研究会」について報告をさせていただきます。

1 0 月 2 6 日に、教育委員の皆様始め、小中一貫教育推進委員、また講師である京都産業大学の西川教授、市内の小中学校の教職員、布佐中学校区の地域住民や保護者約 6 0 0 名に集まっておきまして、この日、研究会を行うことができました。この布佐中学校区は平成 2 6 年度に市の指定を受けまして、ことし 3 年目ということで、中間発表というような位置づけで今まで小中一貫教育の取り組みの内容、またその成果について発表が行われました。

当日は布佐中学校、布佐小学校、布佐南小学校それぞれで授業展開が行われ

ました。この授業についてはグループを使いまして、グループ活動とそれから協働、特にグループの中での話し合いとか、一緒に行う作業とか、そういったものを大切にした授業というのが行われました。その中で特に印象的だったのは、布佐小学校の6年生と布佐南小学校の6年生が布佐中学校に行って、そこで中学生と一緒に英語の授業を受けている姿、そういったものは本当に他中区の先生方にとってみれば初めて見る光景で、非常に学ぶべきものが多かったなと思われまます。

後半は、布佐中学校区の取り組み等が発表されましたが、その中で特に出てきたのが、1つは子供たちが小学生から中学生に上がる時の不安感の減少。それから小学生が中学生あるいは中学校の先生に対するイメージ、こういったものは今までちょっと怖いなというものがあったのが、それがなくなってきたというようなこと。

それから、この布佐中学校区が重点を置いてきた学力の向上といった部分において、例えば書く力を小中で身につけるように努力してきたり、あるいは家庭学習、こちらが家庭での呼びかけ、あるいは家庭学習のやり方、そういったものを統一して家での学習時間がふえてきたこと。そして何よりも教職員の意識、小中学校の教職員が9年間を見通した中で子供たちを育てていこうと、そういう意識が明らかに違って来たというような発表がされました。

今後、これを受けまして、この布佐中学校区の取り組みを他の中学校区にもぜひ取り入れるところは取り入れて、平成31年度の全市展開に向けて進めていきたいというふうに考えております。以上です。

○倉部教育長 ありがとうございます。

ただいまの報告について、質疑があればこれを許します。

○北嶋委員 その後、学校訪問でも布佐中学校に行かせていただいたので、いろいろ詳しくお聞きしました。今、御報告があったように布佐中学校の先生方、

あのときにお会いした先生方は、皆さんとても前向きでしっかり受け入れられて力強く考えられました。ただ、その中で、いろいろ時間的には忙しいことも出てくる。しかし、小学校から9年間を見通せるし、小6の子供たちが中3の合唱を去年聞いて、ことしは中1になって一緒に合唱に加わって、自分がきちんとそのステップを上がったのではないかという話も聞きましたし、また教員は、小学6年生が中学でどういうふうに変化していくのかも見ることができたということと、今あったように私もすばらしいなと思ったのは、中学校の2年生があいている教室を使って、そこに小学生を招き入れて、中学校の教室の机で学習体験ができるというのは、これは何も布佐中だけでなく、どこの学校でもできることで、報告書を見ると、なかなか自分の学区では難しいという先生の話が書いてありましたけれども、やれるところはまねすればできることはいっぱいあるのではないかと思います。ただ、この小中一貫に全校の先生が皆さん来られたわけではないので、ごらんになった方がそれを自校に持っていかれて、どういうふうに進められるかなという思いもあります。

それから、小中の先生たちが自分たち同士のつながりができたことがとてもよかったと。あの規模の学校ですので顔見知りになって、自分が違う小中に行ったときに子供の顔もわかるということで、学校訪問のときに布佐中学校の先生方からとても前向きなことを聞きました。ただ、これは布佐中学校だからできるのではないかという意見もあったりして、その辺はこれから我孫子市内に来年度から広げていくに当たっては、今やっていいと思っている先生方の生の声を他校に広げたほうがいいのではないかなと。教育委員会が進めるのと一緒に、先生方で自分はこうだけれども、こういうふうにとやたらうまくいったという経験をほかの学校にも広げていくことによって、少し先生方の小中一貫ギャップが減るのではないかなと思って伺いました。

先ほども申しあげましたけれども、個人個人の努力だけで任されているは

難しいので、教育委員会からの支援がとても必要だという御意見もあったので、その辺は我々もきちんと意識して進めていかなければいけないのかなと思いました。ただ、とても小学校の先生方も中学校の先生方も、布佐中学校に関しては前向きにいらっしゃるということを、ひしひしと実感として感じてまいりました。ありがとうございます。

○倉部教育長 大島課長、今後展開するに当たっての思いを語っていただけますか。

○大島指導課長 いろいろと御意見ありがとうございました。

今回、この布佐中学校区の取り組みをさらに生かしてということなのですが、当然課題というものも大分見えてまいりました。特に布佐中区以外の先生方が実際に布佐中区の様子を知って、これと同じことが自分たちの中学校区でもできるのだろうか。特に布佐中学校区は非常に地域の密着が強くて、また学校規模もそんなに大きくないというところ、これがほかの中学校区に行きますと大規模校等もありまして、同じことはなかなか難しいのではないかと。それから分離型という中で小中一貫教育を進めていく上で、一番大切なのはカリキュラムをきちんと精選してつくっていくのかということ。決して単なる交流行事だけのイベントであってはいけないなというところは感じております。また、職員の負担感、こういったものが解消できるように、今後とも学校の意見もどんどん取り入れながら、各中区に合った小中一貫教育をつくっていきたいなというふうに考えております。

○倉部教育長 ほかに、この件について御意見あるいは御質問があれば。

○豊島委員 今のやりとりで、私もそれは賛成なのです。もう1つは、この間発表してくれた布佐中区の中心になって動いてくれた、たくさんの先生方なのですけれども、その先生方が直接に残りの5中区の先生方と、中心となって進めてくれる先生はもちろんなのですけれども、また、それにかかわる小学校の

先生方同士の話し合いができるような集まりというのは、どのくらいの回数と
いうか、どのくらい行われているというふうに思われているのでしょうか。

○大島指導課長 実際はこの小中一貫教育を学校を中心として進めているのは
教務主任になりますが、市内各学校の教務主任が集まって行う研修会が年3回
ございます。実は布佐中区の公開が終わった後も教務主任会を開きまして、そ
こで布佐中学区の3校の教務主任から、今回の公開を受けての成果や、あるい
は課題というものを全ての小中学校に伝えることもできまして、それが直接話
が聞けるいい機会になったかなというふうに思っております。

○豊島委員 組織のあり方としては、それでいいのだと思います。ただ、今回
の反省の感想などを読んでおきますと、これは参加した先生方の一部ですけれ
ども、ほんのわずかですが、例えばどこまで仕事の量がふえていくのか不安だ
とか、それから毎日が忙しく余裕のない中で小学生対象の乗り入れ授業を行う
のは苦しいものがあるとか、マイナスイメージだけ拾っていけばそれはそれで
あるのですけれども、布佐は先ほどおっしゃったように地域も狭いし、それで
も南は離れていますけれども、それでも一定の距離内でできるのだけれども、
そうでないところはあるわけで、一緒に合同授業をやるといっても距離の問題、
時間の問題というのがありますから、そのところをどういうふう乗り越え
ていくかというのは教務主任さんだけの話し合いで済むのかなと、ほかの先生
方の協力というのは得られるのかなと。そこは私は気になって仕方がなくて、
先生方の協力がなければこれはできないので、そのところが年3回の教務主
任の会議でカバーできるものなのだろうか、ちょっと私は正直不安があるの
ですけれども、いかがでしょうか。

○大島指導課長 ありがとうございます。

おっしゃるとおり教務主任だけでは、当然それが全職員に伝わっていくか
というところは、不安となるところではございます。ただ、今回公開を開くに

当たっても、通常ですとこのような全小中学校の教職員が、もちろん当日来られない職員もいましたが、ほぼ全員がそろって、特に後半の布佐中学校区での全体会については、ほぼ全職員がそろって共有ができたということは非常に大きかったなというふうには思っております。

ですので、今後も何かこういう大きなことを伝えるときは一部でなく、こういった研修会、できるだけ多くの教職員が意識を共有できるような機会は設けていきたいなというふうに思っております。

○豊島委員 ありがとうございます。よろしく申し上げます。

○倉部教育長 それに加えて、年に1回小中一貫教育の日は、それぞれの中区でありますので、それをうまく使っていただいて、ほかの先生方にも共有していただければいいなと思っておりますので、そういう機会も通じて広めていきたいと思っております。

○豊島委員 ありがとうございます。

○倉部教育長 ほかに、この件についてよろしいですか。

○北嶋委員 もう1つ、地域と一緒に進めましょうということですので、地域の方が各中区の先生方に「小中一貫って何ですか」と聞かれたときに、それぞれがある程度地域の方が理解できる、保護者が理解できるような説明能力というか、そういうのをつけておいたほうが、これからはいいと思います。この布佐中区では皆さん地域上げてわかっていらっしゃいますけれども、我孫子は広くいろいろな学区がありますので、その辺で先生方が「いや、大変なんでしょう」とか、「わからないです」ではなくて、聞かれたときに、いやいや、こういうことで、目的は学力向上とか中1ギャップとかいろいろなことがあってという、ある程度地域の方がわかるような言葉で説明ができる力をつけておいていただいたほうが、今後広めるのに少しでもスムーズに進むのではないかなと離れた地域にいて思っておりますので、よろしく申し上げます。

○倉部教育長 要望ということですか。

○北嶋委員 はい。

○倉部教育長 ほかにいかがでしょうか。——よろしいですか。

(「なし」と呼ぶ者あり)

○倉部教育長 それでは、小中一貫教育については以上とします。

ほかに御説明はありますでしょうか。

○鈴木文化・スポーツ課長 文化・スポーツ課から御報告いたします。事前に郵送させていただきました「我孫子市文化芸術振興基本方針」の時点修正について御説明いたします。こちらの資料になります。

この方針の期間は平成22年度から5年間となっており、平成27年度に改訂の時期を迎えましたが、同じく27年度に「我孫子市第三次生涯学習推進計画」や、教育大綱のもと「我孫子市教育振興基本計画」が策定されるということで、それらに合わせて行っていくことにしておりました。

今回の見直しにつきましては、基本的にはこれまでの方針を踏襲しまして、前文や基本方針の期間などの時点修正にしております。修正部分は全部で4カ所になります。事前にお送りしておりますA4横書きの資料をご覧ください。

まず1点目の修正は前文の部分になります。前文につきましては「国の動き」を追記しました。国のほうでは平成13年に「文化芸術振興基本法」の制定後、平成14年に「第一次基本方針」を策定しまして、その後、二次、三次、四次と基本方針を作成しております。これらにつきましては、いずれも時点修正でありまして、基本的には社会全体で文化芸術を振興していく必要があるといった基本の姿勢は変わっておりません。

2点目は、この方針の期間です。期間につきましては、平成27年度に作成しました「我孫子市第三次生涯学習推進計画」に合わせまして、平成28年度から10年間としております。

3点目は「文化芸術活動や発表の場の確保」といった部分の記述を、「大規模ホール機能の確保を図ります」という表現を「施設の整備に取り組みます」としております。

続きまして、4点目「生涯学習推進計画に基づく施策の推進」の部分の記述を、タイトルに「等」を追加しております。我孫子市でも教育大綱のもと新たに「我孫子市教育振興基本計画」が策定されたため、施策の推進につきましては「生涯学習推進計画及び教育振興基本計画に基づき施策の推進を図ります」としてしております。以上、4点が時点修正した部分になります。

今後はこの基本方針をもとに、我孫子市の文化芸術の振興を図っていきたいと考えております。説明は以上です。

○倉部教育長 ありがとうございます。

ただいまの文化芸術振興基本計画の時点修正について、何か御意見なり、御質疑があればこれを許します。

○豊島委員 3点目の修正のところですが、「発表の場の確保」というところですけれども、背景はわかるような気がするのですが、「大規模ホール機能の確保を図ります」から「施設の整備に取り組みます」というふうに変えた背景は何ですか。

○鈴木文化・スポーツ課長 この修正前の文章を読みますと、真ん中に「新たな大規模ホールを含めた文化施設」、最後にまた「大規模ホール機能の確保」といった同じような表現を使っているため、「新たな大規模ホールを含めた文化施設については、立地や整備方法などの検討を行い、施設の整備に取り組みます」と修正しております。文言がダブっているため修正しました。

○豊島委員 ダブっているのはわかりました。ただ、ダブっているのは置いておくとして、「施設の確保を図ります」というのと「施設の整備に取り組みます」というのは、意味合いとして後退していませんか。意識は同じなのでしょう。

うか。

○鈴木文化・スポーツ課長 私どもとしましては、後退しているというふうには認識しておりません。

○豊島委員 そんな聞き方は、ちょっと意地悪な聞き方だと承知していますけれども。我々も若干の文化行事を行うときに、わずかではありますけれども、寄附金を募集して集めています。微々たる額ですけれども。そのようにして大規模ホール、文化施設を何とか確保したいというような気持ちでいるものですから、そここのところを言葉のダブリは別として「大規模ホール機能の確保を図る」というのと「施設の整備」というのは、施設があつてさらにそれを整備するという意味もあるし、「施設の整備」というのは施設を新設するというのとちょっと違うし、そここのところですぐにはなかなか実現しないのだよという気持ちが少しあらわれてしまったかなというふうに正直思ったのです。そうだったら残念だなというふうに思ったのです。

○小林生涯学習部長 ちょっと補足をさせていただきたいと思います。修正前の部分につきましては、文言が屋上屋的などころがありましたので、これは変えさせていただいたということで、いわゆる「施設の整備に取り組みます」ということで、現在もまずどこにつくるのかというようなことを決めて、4カ所ぐらい候補地を決めた上で、今のところは水の館周辺だということ、まず場所の選定は終わりました。次に、これからは施設をつくるとすれば、どういう施設をつくるのかということ、企画サイドと今年度中ぐらいにまとめたいということで、一つ一つ段階を踏んで事業をしていますので、もちろん大規模ホールの確保を図るためなのですけれども、実際の事務事業としては計画書をつくって皆さんの意見を聞いて決定をしていく、そういう事務のプロセスがありますので、それをここで書いた、いわゆる「施設の整備に取り組みます」ということで、その辺は全体を含めたものをここであらわしたいというふうに考え

ましたので、この表現にしたということで、我々文化振興を図る担当者としては、ぜひこの施設は実現したいということで、強い思いはここに書き込んだつもりではおりますので、そのように御理解いただければと思います。以上です。

○豊島委員 強い思いをここから感じ取ります。よろしく願いいたします。

○倉部教育長 ほかにいかがでしょうか。——よろしいですか。

(「なし」呼ぶ者あり)

○倉部教育長 それでは、文化芸術振興基本計画の時点修正については以上とします。

それでは、これより事務報告に対する質疑の時間とします。質疑があればこれを許します。

○北嶋委員 4ページの事業名6番の研修会の内容なのですが、「就学时健康診断の反省」とありますが、どのような内容かお伺いすることはできますか。

○吉川学校教育課長 現在、就学时健診につきましては実施をしているところでございます。明日の高野山小学校を最後に終了するのですが、3番のところに、15日までに終わった学校を記載しております。そちらで実施した際に、こんな工夫をしたらスムーズにいったというような情報交換とだけいただければと思います。以上でございます。

○北嶋委員 ありがとうございます。やり方の情報交換ですよね。

もう1つお伺いしたいのは、就学时健診は通知を各御家庭に出しますよね。通知を出してお返事もなく欠席された場合とか通知が戻ってくる場合とか、もしあるのだったらその辺を伺いたいのですが、受診を受けなかった子供たちがいるのかいないのか、我孫子においてはその子供たちの後追いができているのか、そのあたりをお伺いできますか。

○吉川学校教育課長 出欠につきましては丁寧に対応をしております、事前

に欠席連絡があつて、別の学校で受診をしたいというような方法で調整をする方とか、また当日、受け付けの時間にいらっしゃっていない方については、その場から連絡をとって確認し、当日が無理であれば、別な会場というような調整を行っております。また、連絡がつかない場合については、保育課等とも連絡をとりまして、実際に我孫子市に居住しているのか、お宅まで訪問し、お会いできないときは通知をポストに入れてくるというような対応をしております。

○豊島委員 教育研究所の10ページの7番目のところですが、11月11日に行われた「第2回特別支援教育コーディネーター研修会」の件です。お聞きしたい内容は、各小中学校の特別支援教育コーディネーターを初めとする支援の担当者、あるいは相談担当の先生方等の29名の集まりなのですが、何校かに行かせていただいている間に、特別支援を担当している先生方の数が相当数は必要だなということは実感しておりましたけれども、学校によっては本当はかなり深刻な問題もあるということで、全体の数を含めて、ここはコーディネーターの研修会ですけれども、コーディネーターを含めて特別支援の学級を担当している先生方の数等の問題で、今我々が問題にしなければいけないことは何かありませんでしょうか。

この間もある学校では、これを確保するという意味で結構苦勞しているというところもありましたので、その辺のことをちょっとお聞きしたいと思うのですが、いかがでしょうか。

○倉部教育長 初めに、水戸所長のほうでお答えできますか。

○水戸教育研究所長 お答えいたします。

特別支援教育という教育課題そのものが、出てきてから10年ぐらしかたっていない課題でございます。特別支援教育コーディネーターは小中学校に1名ずつでございます。特にこの研修会につきましては、やはり現場の先生方が大変悩んでいらっしゃることもありまして、実際に困っている担任の先生も1

校から3人いらしたという学校もありました。そのくらいやはりそれぞれの学校で、今後の教育課題として重く受けとめている課題なのだろうというふうに考えております。

先ほど豊島委員からありましたように、特別支援学級そのものは増加をしている状況です。しかしながら、特別支援教育専門のいわゆる免許を持った先生がそれだけ増加をしているかと言えば、残念ながらそういう状況ではありません。したがって、これまでは通常学級の担任の先生をされていたのだけでも、こういった機会に自分がやってみたいという思いを持たれて、新たに特別支援学級の担任をなさっているという方も決して少なくないという状況です。ですので、そういった先生方、それから通常学級にいらっしゃる先生方も含めて、研究所としてはそういった知識ですとか、スキルですとか、そういったことを私どもの中でできることは各学校に助言をしていきたいと思っておりますし、また、多くの先生方にこういう講師の先生の御指導をいただける機会をつくっていかねばならないのかなと研究所としては考えているところです。

○吉川学校教育課長 今の研究所の話を受けまして、学校教育課では校内で特別支援学級の担任ができるようにということで、校長先生方には通常学級の先生方にこのような研修を受けてもらい、そしてある程度若い時期に一度特別支援学級の担任となり、その経験を通常学級に戻ったときに、支援が必要な児童生徒に生かすよう声かけをしております。

あわせて教育事務所の方から、特別支援学校の職員、交流3年という職員もおりますし、また特別支援学校で勤務をしていた職員で小中学校に勤務して、その経験を生かし、特別支援学級の担任または通常学級でもその経験を生かしたいという職員を異動させてもらうために要望し、我孫子市へ特別支援学校から勤務を希望している人がいるという情報を得ながら、各学校の特別支援学級の状況に合わせて配置をしているという状況でございます。

今後も、特別支援学校というよりも特別支援教育の教員ということで採用がされていくような中で、特別支援学校から普通学校への教員の異動と申しますか、そういうのも結構できるようになるという情報もいただいていますので、そのような県からの情報をしっかりと把握いたしまして、対応に努めていきたいなと思っております。

○豊島委員 本当にそれは大変な役割で、確保するというのが大変だろうなと思いますし、我々に何ができるか、全力で応援したいと思うのですけれども、特別支援教員の新しい採用というのは、例えば今までとか、この先の見込みというのは、我孫子市は持てるのですか。定期採用とか新採とか。

○吉川学校教育課長 市町村立学校の採用につきましては、県の方で行っておりますので、我孫子市が何人必要かと要望はしますけれども、それに合わせて採用するということではないので、小学校の採用試験、中高の採用試験、それから特別支援教育の採用の試験というようなところで受験した方で、恐らく県の方でバランスをとって教育事務所へ配置し、その中から各市に配置することになります。具体的に我孫子市が積極的に何人必要かというのは伝えますけれども、100%要求が通ることは難しいと思います。その情報は教育事務所に伝えながら、より学校現場が困らないような対応をしていきたいと思っております。

○豊島委員 ありがとうございます。ちょっとしつこくなって申しわけないのですが、学校を幾つかを回らしていただいている、特別支援の教育というのは、これはちょっと何とかしないとだめだぞという感じを私は思っているのです。例えば普通の教員で特別支援を持っていますというのもいるのですよ。でも、あの子たちはスキルなんかは知らないですよ。中でスキルを教えてもらったりして、それになっていたりするベテランもいます。だけれども、今はどんどんそういうようになっていくよりも、もっともっと特別支援のクラスが

ふえているなというのは実感だし、特別支援教員の採用といたって受験生もそんなにたくさんいないだろうし、採用だってそんなにたくさん県ではしないだろうし、この先我孫子市だけでなく、どこだってそうだろうという気持ちはあるので、そうすると県全体で、あるいは市の力をもっと、東葛みんなで力を合わせて、もう少し何とか声を上げていかないと、先々先生方が共倒れになってしまうとかわいそうだし、そんなことは許されないし、何か方策は必要ではないかなと今切実に思っているのですけれども。そんなわけで、しつこくこのことをお聞きしたのですけれども。そういう動きの中で、我々もできることは何でもやりますけれども、要望するだけでは、ちょっとどうかなという気があったものですから、しつこくなりましたけれども、何とか知恵を出し合ってお願ひしたいと思います。

○倉部教育長 要望でよろしいですか。それについて市のレベルの中で答えるというのはなかなか難しいと思いますけれども、年に1回、それぞれの教育委員会が、いわゆる県の会議等に要望書を提出して、必ずその項目には入っているのです。ただ、毎年同じ項目で入っているのです、残念ながら受けとめるほうとしては、その他大勢のうちの1項目という扱いになってきていると思います。ただ、聞くところによりますと、県の試験の中で特別支援の試験は比較的受かりやすいという言い方はおかしいですけれども、受験をして合格しやすい科目のようにも捉えられるところがあるので、学生がむしろ特別支援を積極的に受験できるような環境づくりも、大学のほうでそのような思いを持って一緒にそういうものを広げていくというのが必要かなと思っていますので、そういう面で一緒にいろいろなことを考えていきたいなと思っています。よろしくお願ひいたします。

○北嶋委員 12ページの生涯学習課、企画調整担当にお伺ひしますけれども、まずこの卒サラ講座、4回終わって、ここに書いてくださっています。この

最後に、2月にもう1回アンケートをとりますよというのは、なかなかいいかなと思います。たった4回の講座ですので、皆さん興味津々でお受けになって、講座が終わったで解散してしまうと本来の目的から外れてしまいますし、皆さんの御意見を聞くと、ほぼ半分ぐらいの方は御自分の趣味のため、半分ぐらいの方が地域に貢献したいという御意見があったみたいですね。ただ、すぐに地域に貢献といっても、時間が離れてしまうと終わってしまいます。それともう1つ、14ページから長寿大学もありますよね。こちらは公民館担当ですが、生涯学習課としては、長寿大学と、ことし初めて卒サラをやって、同じシニア年代の方に対する講座ではありますよね。言うなれば、こちらの卒サラは短期決戦の専門学校的な内容で、すぐに地域デビューしようという目的があり、長寿大学は一般教養とか我孫子市について学んだり、御自分の人生を考えて、4年間を務めてデビューされることが目的になっていると思いますけれども、少しこれから整理していかなければいけないのは、2つ持っていますから、短期間の講座として行った方と、それから4年間じっくり御自分で学んだ方と、目的は我孫子市の人材育成ですよ。たまたま今回は卒サラとかありますけれども、今後これをやっていく上には、きちんと目的を分けていかないといけないのではないかなと私は思います。

卒サラの半分の方が地域に貢献してくれればありがたいことだし、それも求めますけれども、長寿大学の方々が、お受けになってどのくらいの方が本当に我孫子の人材としていてくださっているのかも興味がありますし、2つに分けた理由がおありでしょうから、その辺で見きわめながら進めていってほしいなと思います。今回は初めてだったので結果は出ないのでしょうかけれども、大綱でも人材育成というのは大きな目的になっていますし、生涯学習の推進計画もできていますので、今回は初めてつくりましたけれども、今後これをどうやって進めていくのか、長寿大学をどうやって持っていくのかというのは大きな課

題になるように私は思いますので、同じシニアの方々対象の2種の講座で、目的はほぼ同じなので、その辺をどうやって進めていращやるのかなと、とても私は興味あります。今わかる範囲で、その辺のお返事をいただければ。

○吉成生涯学習課長 長寿大学につきましては、確かに4年間という長い期間ということもありまして、生涯学習審議会の中でも、本当に4年間必要なのですかというような御意見もありました。委員がおっしゃるように、長寿大学の学生さんが卒業されて、地域でどういう活動をされているのかというところを余り今のところ押さえていないようですので、今後はしっかりとそこを押さえていきたいと考えています。今回やった卒サラ講座については、来年度どうやっていくかは今考えているところなのですが、今回はアビスタのほうでやりましたが、我孫子は東西に長くて布佐もありますし、場合によっては近隣センターとかを活用して、そういったところで単発のものをちょっとやってみて、その地域の方がどのぐらい集まるのかということ来年度はやってみようかなと今考えているところです。まだ決まったわけではないのですが、そんなことで長寿大学のほうは卒業生はどうしているのかというのをきちんと押さえることと、うちの企画調整担当のほうでは、単発のものをいろいろやってみて試行錯誤しながら、よりよい生涯学習、人づくり、まちづくりにつなげていくというところを実現していきたいなというふうに考えています。

○北嶋委員 この間の総合教育会議でも、このことは少しお話になりましたけれども、長寿大学は長い歴史があるのはわかっていますし、それが我孫子市の誇りであることもわかっています。ただ、これから市の財政とかいろいろなことを考えたときに、少し今見直す時期にも来ているのではないかと思います。この間もそういう話になりましたよね。なので、そこも含めて、今の時代に合った、シニアの方々が市の大事な人材となっていくための講座をつくるときに、もう1回全体も見直して構築し直す必要が、そろそろあるのではないかと

と思っています。この卒サラ講座が、それに一石を投じてくれたのだと思っていますので、よりよい講座になって、たくさんの人材の方が出てくださるとうれしいなと思います。

○倉部教育長 最後は御意見ということでよろしいですか。期待のこもった御意見だと思いますので、それに答えるように講座のほうをよろしく願います。

○長谷川委員 19ページの「(2)第22回手賀沼エコマラソン大会」のところで願います。参加者が8,892人ということなのですけれども、この人数というのは例年と比べてどうだったのか。あと、たしか去年は駅からバスが出ていたかと思うのですけれども、ことしもそういうことがあったのかどうか教えていただけますか。

○小林文化・スポーツ課主幹 手賀沼エコマラソンに関しましては、今大会から市民枠を1,000人ふやしましたので、参加者はふえています。もともとの参加者を8,000人から9,000人にふやしましたので、その分ふえております。バスにつきましては朝と帰りに我孫子駅～会場、会場～我孫子駅のバスを運行しまして、かなり評判がいいので今後も続けていけるのではないかと考えております。

○長谷川委員 1つ教えていただきたいのですけれども、参加者の手荷物ですとか、そういうものも預かるとか、そういうこともやっていらっしゃったのですか。

○小林文化・スポーツ課主幹 荷物につきましては、会場に荷物置き場というブースがありまして、そこで手荷物を預かって、帰りにとりに行っていただくという形でやっております。

○長谷川委員 わからないことだったので、ありがとうございます。

また、この後、新春マラソンとかもありますので、その辺でのノウハウとか

もここにも生かしていただけたらと思います。

○倉部教育長 要望ということで、ぜひノウハウを生かしてくださいということですので、お願いします。

○豊島委員 先ほど北嶋委員が御質問していただいた12ページの生涯学習課のところに戻らせてください。先ほどおっしゃったやりとりは、私もそのとおりありがたく聞きました。この「卒サラ講座」というのは、「卒サラ」というのはそのとおりの意味での名前なのでしょうか。これは名称の意図は何なのか、もう1回ちょっと確認させてもらいたいのですけれども。

○吉成生涯学習課長 「卒サラ講座」というのは、基本的にはサラリーマン、現役をリタイアされた方を対象にというような意味合いで「卒サラ」という言葉を使っています。サラリーマンを卒業するための講座ということではなくて、現役をリタイアした後の地域での過ごし方ですとか、生きがいの見つけた方ですとか、そういったものを学んでもらう講座という意味で「卒サラ講座」というネーミングにさせていただいています。

○豊島委員 おもしろい名前だと思います。そのように理解しておりました。今ここでお願いしたいというか、真ん中あたりに「次の資料を配付し、地域デビューのための情報を提供した。」というふうにあって、先ほど北嶋委員も言っていましたように、地域に貢献できる活動がしたいというのは41%を占めているわけですので、28人の48%というと人数的にはそんなに多いとは思わないのですが、ただ、その中に生きがいを見つけないとか、興味のあるテーマや課題について学習したい、居場所や生きがいづくりに向けてさらに云々があるから、このテーマに沿った気持ちの方々が集まってくれたのでよかったと思うのですね。その点ではいいと思うのですけれども、長寿大学があるわけですので、こういうのももちろんあっていいのですが、前にもどこかで申し上げたのですが、小中一貫教育なんかで地域と学校のかかわりというのが本当に

今重要になっているものですから、何かそういうテーマのもので、もう少し小中一貫教育とか学校と地域と結ぶ方向での内容がある講座をこういうところで計画してもらえたらありがたいなと思うのですね。そうすると、ここにあるように我孫子市シルバー人材センターとか町内から始まる地域愛とか、そういうことと余り外れない中で、そういう講座もつくれるのではないかなと思うのですけれどもね。そうしていただいたほうが学校と地域との結びつきを考えてもらえる機会は持てるのではないかなと思うのです。比較的若いといっても、60歳過ぎぐらいからでしょうから、先ほどの北嶋委員の話の中に私のそういう意見もつけてお願いしたいと思うのですけれども、いかがなものでしょうか。

○吉成生涯学習課長　今回は4回の講座を同じ受講生の方に受講していただいたということで、その報告の内容が、今回は10月16日からということですので、最後の1回分しか載っていないのですけれども、前回御報告させていただいた中に、我孫子の中で活動するとしたらどんな活動があるんだよとか、もちろんあびっこクラブも含めて、そういったものも紹介させていただきましたし、あとはさまざまな活動拠点としてこんな施設や場所があるんですよとか、こんな団体があるんですよ、こんなボランティアをやっているものもあるんですよというのも幅広く、一律に総花的に紹介させていただいた部分はあるのですけれども、そうはいつでも教育委員会ということもありますので、今豊島委員がおっしゃってくださったように学校と地域を結ぶというところで、そういったところをより強くアピールしていくというのは十分できることだと思いますので、それは今後、講座をやる中で検討していきたいと思っています。

○豊島委員　ありがとうございます。前に習志野市のほうに行かせていただいて、向こうのほうでの事例発表とか、あるいはほかの市町村もそうなのですが、そういうところで集まりを持って、そして学校の行事に積極的に参加をしていくというふうな中で、PTAとはまた違う、それとパラレルなのだけ

れども、そういう形で学校と地域とが結びついていくという事例がありましたよね。ほかでもやっているからやるというわけではなくて、今我孫子市の小中一貫教育の中で、そういう動きが必要なのだと思うのですね。どうぞ自由にやってくださいと住民の方に言っても、なかなかできないのですよ。自由にやりなさいと言ったって、なかなかできない。それぞれの地域の中で何名かがそういう中に参加していて、そういう方向での講座なんだということがあれば、そこに集まった人たちが力を出し合って、まとまって何かできるのではないかというふうに思うのですよね。我々も、小中一貫カリキュラムとか、そういったところからの方向でやっていこうとしているわけですが、お互いにそういう方向からもやることで、より中身がまとまるのではないかと思うものから、前に言ったことを繰り返し述べたようになって恐縮ですが、そのように思っています。

○倉部教育長 御意見ということでよろしいですか。

今後、そういう講座なりをつくるのに当たっては生涯学習の面からも小中一貫を支える地域の人材育成を考えてほしいという御意見だと思いますので、学校教育、それから指導課の部分も含めて一緒に検討していただきたいなと思いますので、よろしくをお願いします。

○北嶋委員 今のお話につけ加えることになりますけれども、学校支援地域本部が立ち上がったときには、生涯学習も一緒に立ち上がったのですよね。というのは、あれは地域の方たちの集まりなので、今豊島委員からお話が出ましたけれども、学校支援地域本部をこれからもちょっと格上げしていこうというときなので、もしその講座云々をつくる場合には、生涯学習部と学校教育課、指導課を少しミックスして両方でやっていかないと、あびっ子クラブとかああいうのは子ども支援課が入っていて、学校内の先生方の管理は教育委員会が入っていて、そこにまた生涯学習が入ってくるわけですので、その辺は上手に情

報交換をしてややこしくならないように、学校支援地域本部がありますので、そこを核として人材育成をしていったほうが学校はやりやすいと思いますので、その辺生涯学習と学校支援地域本部をもととの形に戻して、うまくつないでいったほうがいいと私は思いますので、よろしくをお願いします。

○倉部教育長 ありがとうございます。今、懸念という部分で大事な部分だと思しますので、現在ある学校支援地域本部の意味合いも含めて、どうあるべきかをちょっと検討していただければと思います。

○北嶋委員 前にも申し上げたのですが、23ページ、図書館にお願いという提案なのですけれども、今、おはなし会というのが我孫子と布佐で行われています。ほかに、そよかぜ号というのが南新木とか我孫子、天王台、それから久寺家、つくし野、中峠をいろいろ回っていますよね。湖北台地区に図書館はありますけれども、会場のスペースの都合上、そこでおはなし会はできない現状がありますよね。私は湖北台地区の図書館でできなくても、いろいろな会場を使って、おはなし会が月に1回でもできたらいいのではないかなど。図書館も生涯学習として地域の子育ての大事な大事な部分ですので、ただニーズがあるかどうかわからないので、私の話が机上の空論になってしまうかもしれませんが、調べていただいて、もしできそうだったら試験的でもいいので、湖北台地区の子供たちが、おはなし会とか、2つありますけれども、こういうに出られるような希望があるのであれば、近隣センターなり公共施設がいろいろあると思いますので、どこかの会場をお借りして、読み聞かせの会ができたらいいのではないかなとずっと思っていました。布佐があつて、我孫子があつて、湖北にも図書館がありますけれども、前に伺ったときに館長から、なかなか難しいというお話もあり、それは私も重々わかっています。ただ、そよかぜ号もあそこは回っていないので、湖北台地区の子供たちが、もしそういう会があれば行くよというのであれば、できてもいいのかなって思っていますので、ちょ

っとお考えくださったらと思います。

○今井図書館長 以前そういうお話を伺ったということを認識しております。固定館3館では今委員がおっしゃったとおり、湖北台図書館についてはスペース的な問題がありまして、過去にはやっていた経緯があったのですが、読み聞かせのタイミングのお子さん連れのお母さんたちがいらっしゃらないということが現在ありましたので、それで少しずつですが、やめるような形になってきたという経緯があったというふうに伺っています。

最近では近所に湖北台西小学校という小学校があったりとか、保育園があったりとか、そういったところから読み聞かせのスタッフの要望があったりとか、園児さんたちがまとまってという形で、御要望があれば出かけるような形をできるだけ強く結びつけるような活動を今後どんどんしていきたいというふうに感じております。また、施設の見学等もありますので、園児さんたちが来たときには、そういったところでお話をさせていただければということで、いろいろな機会を設けて、今後やらないではなくて、何らかの形でやれるような方向で、湖北地区のお子さんたちにもそういった機会を、こちらのほうから積極的に働きかけていきたいというふうに思います。

○足立委員 今のことに関連して感想というか意見ということで、読書というのは学ぶという営みの中で一番基本的な、大切なところなのだろうと思うのですね。今、おはなし会のことでも北嶋委員から大切な御提言があったのですが、湖北台地区で行われていないということですが、就学前の子供に対する読み聞かせの活動というのは、多分幼稚園だったりとか、保育園であったりとか、あるいは子育て支援の現場で恐らく日々やっているような活動になるのかなと思うのですね。ただ、図書館がこういう活動をしてくださるといのは、専門家が入るといことで、図書館が1つの軸になってくるのだろうと思うのです。今、図書館長からも今後前向きに考えてくださるといお話があったの

ですけれども、できれば子育て支援センターであったりとか、幼稚園、保育園を専門家の立場からまとめていくような、1つ発信する基地になるような形で、そこで子供に対する読み聞かせであったりとか、読書を推進するような活動を今後一層やっていただくとありがたいなと思います。

○倉部教育長 御意見ということですか。24ページの3番の講師派遣に、その件が触れていると思うのですけれども、これも含めて今後の思いについて、今井館長。

○今井図書館長 今教育長のほうからありましたように、24ページの講師派遣事業は、まず本、活字に親しみむということでは、小さいうちから何らかの形で親しんでいただきという心を込めまして、今回、進行予定のほうにうまいぐあいに入っているのですけれども、一番最後の16ページの4番に「離乳食教室での乳幼児と保護者に読み聞かせ」、こちらのほうは保健センターが離乳食教室ということで、まだ1歳に満たないお子さんを連れてお母さんたちがいらっしゃる。その待ち時間が受け付け開始から30分程度ありまして、その30分の中で私どものほうで時間をいただきまして、市民ボランティアの方を含めてなのですけれども、児童書に関する専門的にいろいろ講習を受けた人たちが出向きまして、大体6名程度でお1人5分程度、よその市町村では「ブックスタート」という名前で、そのときに絵本を渡したりするのですけれども、我孫子はちょっと予算の関係で本のお渡しまではできないのですけれども、こういった本を最初に読ませるとよろしいですよというような紹介だったり、図書館をぜひ利用してくださいといった紹介だったりとか、私も先日、見に行かせていただいたのですが、物を聞いてわかるかわからないか、しゃべれない幼児ですので、そこに対して読み聞かせをしてどうなのかなといったら、絵本を選ぶことによって、そこを見るのですね。そういったことって、ああ、この人たちはすごいなというか、お子さんはすごいなというか、ちょっと感動したこと

を覚えています。30分なのですけれども、常に行くことによって向こうの保健師さんともうまくやりとりができるようになって、ということはブックスタート、本を渡さなくてもうまいぐあいに事業としては進めることができているのかなと感じているところです。

また、今委員がおっしゃったように、その上の保育園、幼稚園に行かれた年齢においても、出前という形がありますので、こういったものをどんどんPRして進めていきたいと思います。

もちろんここだけではなく、今おっしゃった子供たちがお母さんと一緒に集まるわくわく広場であったりとか、そういったところにも出前講座ということで実際に事業として展開し始めているところでもありますので、今後読み聞かせ事業というか、読書習慣になるような形で事業を進めさせていただきたいと思います。以上です。

○豊島委員 20ページ、21ページの鳥の博物館のところですが。毎回こうやって鳥の博物館の活動を拝見させてもらっておりますけれども、20ページ、21ページの両ページにまたがって、11月に絡む行事がこれだけ行われていて、合わせれば相当の人数が集まっているというのはすばらしいことだなと本当に思っていて、これはやるのは大変なのですけれどもね。鳥の博物館は今ちょっと改築中なので入れないのですけれども、これは我孫子でなければできない行事なので、ぜひ自信を持ってさらに続けていっていただきたいなと思います。11月の行事だけではないのですけれども、それでも11月絡みで、これだけ行事の数があるというのは、22ページのところにも実はあるのですけれども、大変だとは思いますが、これに向けて行った実感と、それから反省材料とか修正材料ということがもしあったとしたらお聞かせいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

○斉藤鳥の博物館長 どうもありがとうございます。ちょうど11月はジャパ

ン・バード・フェスティバルということで、鳥好きの人たちが集まるお祭りが5日、6日にあるということで、それに合わせた、そういう人たちを迎え入れイベントとして館内あるいは館外でイベントを行ったので、特にイベント数が多くなっております。

毎年ジャパン・バード・フェスティバルにはたくさんの人に来ていただいています。地元の方はもちろんですが、全国から鳥に関心を持った方たちが集まっていっぱいますので、博物館のことを知ってもらう、PRするにはとてもよい機会になります。ジャパン・バード・フェスティバル自体は幾つかの会場があるので、そういう中で鳥の博物館にも特に来てもらおうということで、いろいろなイベントをやっております。

やった感想としましては、やればやるほどその効果があるというか、来たいという人が多いので、やっていけばたくさん来てくれるという、すごく恵まれた、ある意味では環境になっていると思います。今後もこういった環境を生かして、全国からいろいろな人たちに来てもらって、そういう人たちと関係をつくることによって、例えば標本資料を寄贈していただいたりとか、そういうつながりを持てたりとか、あるいはいろいろな所でいろいろな活動をしている方がいっぱいいますので、そういう方を招いて講演会をやってもらったりとか、そういうことをもとに企画展を開催したりとか、広がりが出てきますので、そういうつながりをたくさんつくっていくことが、今後は大事なのかなと思っております。

来館者数だけ見ますと、ことしは鳥の博物館自体に5, 839人という今までで最も多くの方に来ていただきましたので、流れとしてはいい方向に向かっているのではないかなと思います。以上です。

○豊島委員 ありがとうございます。今修理をしているというのは、どういう修理ですか。

○齊藤鳥の博物館長　たくさん来てもらった後に、今は全く入館者がいないという状態なのですけれども。鳥の博物館も築26年たちまして、設備がいろいろ老朽化してしまっていて、今は空調設備の更新工事を行っています。メインの機械を取りかえたり、配管を全て取りかえたりということで、天井を剥がしたり、壁を剥がしたり、大規模な工事になっております。オープンしながら工事はできないということでしたので、11月7日から3カ月間、ちょうどジャパン・バード・フェスティバルが終了した次の日から1月31日まで閉館させていただきまして、2月1日から新たにスタートするということになっております。

○倉部教育長　鳥の博物館につきましては、山階鳥類研究所とのかかわりが非常に強く、創設当初からそれがあってというところもあります。最近の話の中では、部長も含めて私も一緒にお話をする機会があるのですけれども、山階鳥類研究所は研究機関であって、なかなか発表する場がない。その発表する場を実は鳥の博物館でも使ってくださいというようなお話があって、どんどんこれからはいろいろなかかわりを強めていけるという余地がありますので、それを進めることによって鳥の博物館そのものの付加価値といいますか、価値も上がってくるという、両方にとっていい関係を今後も引き続きつくっていきたいなと思っておりますので、いろいろな形でそれに応えられる展示等ができればいいと思っております。

○豊島委員　もう1つ、いいですか。しつこくてごめんなさい。18ページ、19ページの文化・スポーツ課のところですか。特にその中で18ページの2番目の「歴史文化財担当」主催事業で4件ということで、10月30日、11月12日、11月12日、11月13日と、白樺文学館、旧井上家住宅とか、ほかにも回ってもいいとは思いますが、4回を2つの会場でやったのですけれども、このような行事というのはいいなと思うのです。一括してというか、計画的に4つの行事をそれぞれ2つずつで回して行って、それぞれ知って

もらう。1回の人数はそれほど多くないですけれども、特に旧井上家住宅なんかは43人、45人というのは、2回には分けてはいますけれども、場所の制限もあるでしょうから。全体としては、結構人数は来ていただけたのでよかったなと思っているのです。この行事は、旧井上家住宅が修復されれば、さらにまたグレードアップされていくのでしょうから、その宣伝にもなったのではないかと考えております。

やってみた予想と、こういうところはどうだったかなというところがございましたら、私はどれも行けなくて反省しているのですけれども、実際にやってみて予想どおりだったのでしょうか。その辺、実感を聞かせていただければなと考えております。

○鈴木文化・スポーツ課長 お答えします。

歴史文化財の主催事業で4件、この中の(1)と(4)につきましては白樺文学館でのイベントなのですが、(1)につきましては朗読、(4)につきましてはピアノの弾き語りということで、これは今現在毎月1回ずつやるようにしております。かなり浸透してきておまして、今回ピアノは少なかったのですが、大体20人前後の方がお見えになっております。(2)(3)の旧井上家のイベントなのですが、これは別々に参加者を募集をしました。SPレコードに来た方が急遽工事現場見学会も出たいということで、そういった関係では同日に違うイベントをやるのは、かなり効果があったのかなというふうに考えております。工事現場見学会も予想以上に参加者が多くて、この時期ではないとなかなか見学できないものなので、今後もこういったイベントは行っていきたいと考えております。以上です。

○豊島委員 ありがとうございます。よろしく申し上げます。

○倉部教育長 事務報告はよろしいでしょうか。

(「なし」と呼ぶ者あり)

○倉部教育長 ないものと認めます。事務報告に対する質疑を打ち切ります。

次に、事務進行予定について、質疑があればこれを許します。

いかがでしょうか。

○足立委員 2ページの指導課の「幼保小連携推進委員会」です。我孫子市の幼保小連携接続カリキュラムの試行版というのが今年度出されましたけれども、これから本格的にそれを導入して、幼保小連携のさらに推進を図っていくということになると思うのですが、幼稚園、保育園の現場で見ていて難しいと思うのは、幼稚園、保育園というのは独立した経営体で、それぞれ特色を持ってやっているという中で、この話はことしの文科省で行った市町村教育委員会の分科会で聞いた話なのですが、幼稚園の現場では本来でしたら幼稚園教育要領をもとに幼稚園教育を行う。それは大前提なのですけれども、残念ながら現場の先生の中には幼稚園教育要領を読んだことがないというような人もいます。ともすれば、幼稚園教育の特色、その園の特色というものが幼稚園教育要領から少し逸脱したような形で行われる。それは幼稚園に限ったことではなく、保育園であれば保育所保育指針、子ども園であれば子ども園教育・保育要領というものがあるのですけれども、それぞれが特色を持ってやっていくといいのですけれども、今、保育所保育指針、幼稚園教育要領、子ども園教育・保育要領と3つ名前を出しましたけれども、それは3歳以上の子供であれば内容は基本的には同じものですので、同じ方向性でやっていかなければならないというものだと思うのですね。この我孫子市の接続カリキュラムを導入するに当たって、幼稚園だったり、保育園の温度差というのでしょうか、足並みというのですか、そういうものがもう少しそろっていかないと、なかなか導入が難しいのかなというように感じているのですけれども、何かしらその見通しのようなものがあれば、少しお聞かせいただきたいのですけれども。

○倉部教育長 教育委員会の立場で答えられる部分で結構ですので、指導課長、

よろしいですか。

○大島指導課長 済みません。まだこの辺は私も不勉強で、いろいろ要領とか、先ほどありましたが、私もちょっと頭に入っていないところがあって、この幼保小の担当の指導主事からの話では、今月もずっと地区別の研修会を行っていますが、特に幼稚園あるいは保育園の温度差というものは、すごく感じるというような話は聞いておりません。きょうも実はあったのですけれども、小学校1年生の生活の様子とか、給食、掃除、そういったところを園の先生が見て、少しでもスムーズに園から小学校への引き継ぎができるようにということで交流を図っているということを聞いております。そんなところなのです。

○倉部教育長 よろしいですか。

○足立委員 先ほどの話の中で、小学校での特別支援の話も出ていましたけれども、小1問題をいかに解消していくかというのが、幼保小連携をやっていく中では、1つ大きな目的に入ってくるのだと思うのですけれども。私、小中一貫というのは、教育委員になって初めてそういう言葉も聞きましたし、小学校、中学校の先生というのは、みんな一緒にやっているのだというようにしか思っていなかったのですね。それがいろいろお話を聞いていると、同じ教育現場でもなかなか、小中学校の先生というのは交流の機会もそれほど多くなかったし、なかなか一緒にやっていくのは難しいと。まして幼保小となると、さらにその難しさというのが出てくるのかなと。その中で接続カリキュラムというのは1つ足がかりになるといいますか、我孫子市でせつかくいいものができたので、これをぜひともしっかりと導入して、それぞれの幼稚園だったり、保育園、それから小学校で、同じものを持ってやっていくということが、すごく大切になるのだろうなど。今まで、ともするとちょっとばらばらの方向を向いていた幼稚園、保育園の就学前の世界も、少しこれを足がかりにして、共通の目的を持ってやっていくのに、すごく大切なものになるのではないのかなと

思って、このような漠然とした質問で申しわけなかったのですけれども、お聞きした次第です。

○倉部教育長 まさしく幼保小連携は、中1ギャップと同じように小1プロブレムという問題意識を持って、それをつなぐという取り組みの1つですので、とても大事な、特に特別支援も含めて、それぞれをつないでいく、校種が違うからといって人任せにしないというのが多分大前提に立っていて、一緒になって考えるというのが、ようやく我孫子市の中で定着してきたというふうに思っています。それを大事に、それぞれの分野でちゃんとつないでいながら、中学校までつなぐというのが我孫子市の方針だと。それをいかにうまくしていくかというのは、私たちの力も加えてというところもあろうかと思っておりますので、ぜひ教育委員の皆さんと一緒に考えていきたいなと思っています。

後で触れようかと思っていたのですけれども、きょう午前中に、まさしくその先の中高一貫につながる東葛中学校を教育委員で視察をさせていただきました。先進的な取り組みの中で、条件は違うのですけれども、それぞれの校種が、校種をまたいで子供たちの考えていく時代、「高大接続」という言葉もあります。ですから、そういうものを意識しながら、それぞれの教育現場を預かる先生たちが一緒になって考えていくということを進めていかなければならない時代だと思いますので、私たちは義務教育を主にやっていますけれども、それぞれの接続も含めて子供たちを考えていかれたらいいかなと思っています。頑張るしかないのですが、よろしくお願いします。

○豊島委員 1つだけお願いします。12ページの文化・スポーツ課のところ、例の夏目漱石の書簡なのですが、白樺文学館と杉村楚人冠記念館で12月3日、4日に行われます。図書館ではアビスタホールで講演があったりするわけですが、それとあわせて白樺文学館のほうでは3日、4日、2日間だけ夏目漱石の志賀直哉宛ての書簡を展示するというので、これは非常によかったと

思います。私は本当は行きたいのですけれども、3日、4日は青森に行かないといけないものですから見られない。先ほど図書館の人におわびしたのですけれども、本当に申しわけない。「参加対象者 中学生以上・各日先着120名」とあるのですけれども、これはもちろん中学生とかには、案内は学校のほうに出しているのでしょうか。高校生に出すわけにはいかないのでしょうかけれども、小学生はあれでしょうが、中学生にはこういうのがあるよと学校のほうには連絡か何かしてあるのでしょうか。

○鈴木文化・スポーツ課長 今委員がおっしゃった中学生以上に対しては、特に個別には出しておりません。広報でのお知らせとホームページでのお知らせになっております。

○豊島委員 それが普通かもしれませんけれども、夏目漱石といえば中学生も大体わかるし、そういう書簡があるのだということは、これがふるさとの1つの誇りになるかどうかわかりませんが、1つの重大な問題ではありますものですから、学校の先生を通してでも何か連絡がいけばいいなと思っていたものですから申し上げました。ぜひたくさんの方に話を聞きに来てもらえればなど期待しております。よろしくお願いいたします。

○倉部教育長 よろしく申し上げます。

この2つの事業については人気が非常にあって、ほとんど満杯の状況だと思えます。中学生を対象にというふうになると、また別の形でのアプローチ、我孫子にこういうものがあるということ、いろいろな形で知らせていくということが大事ななと思っています。ただ、今回は講演会ということで、一般の方も含めた形での募集に限定されてしまったのかなと思っています。我孫子が誇るいろいろな施設の中での史料ですので、それを学校現場にも反映していただければありがたいなと思っておりますので、今後の検討をよろしくお願いいたします。

進行予定については、ほかにいかがでしょうか。——よろしいですか。

(「なし」と呼ぶ者あり)

○倉部教育長 質疑がないものと認めます。事務進行予定に対する質疑を打ち切ります。

次に、教育事業全般について、何か御提案はありますでしょうか。

○北嶋委員 先ほど申し上げたのですけれども、ことしの学校訪問は湖北小と布佐中に行きました。湖北小に行ったときに多くの先生とお話できてよかったです。私の班でお話ししたときには、特別支援学級の担当の先生がいらっしゃって、その先生としては、特別支援学級の子供たちと一緒に学べるのはとてもやりがいがあってうれしいのですが、特別支援学級の子供たちというのは情緒とか発達障害がありながら、体の機能に少し困り感がある子が多い。そういうのは自分たちの知識ではなかなかフォローすることができないので、できれば作業療法士の資格を持った方と、月に1回でも学ぶことができればなというお話がありました。たまたま湖北小は近くに支援学校もあるので、あそこから月に1回でも来て我々に何か教えてもらったり、また子供を見てもらって、この子はこういう困り感を持っているからこうだよという具体的なことを聞けると、より一層の子供への支援に力がつくのだけれども、今それがいいのですよねと。ちゃんと特別支援の資格を持っている方ですら、そういうお悩みでした。

先ほど豊島委員からもお話がありましたけれども、資格を持ちながらも、子供が100人いれば100人違うので、悩みながらやっぺらっぺら。そういう方々が悩まれてしまうと、ほかの先生はなお一層悩まれてしまうので、そういう方々の悩みを少し軽くしてさしあげるための方策を、市では考えなければいけないかなと思います。あちらは県立で、私が言うように簡単に来てくださいとはいかないでしょうけれども、せつかく地域に発達センターがあり、それから県立の特別支援学校が小中高まであるので、その辺の力をかりながら我

孫子に今不足している特別支援学級の先生たちを助けたり、特別支援学級の子供たちをより一層育ててあげるためのプラスアルファができればいいかなと思いますので、私も教育委員会で話しますねと聞いてきたので、ここでお伝えしなければならぬので御報告しましたけれども、何かいい方法が見つければいいかなと思っています。すぐにはできないと思いますけれども、そちらに向けて御努力をしていただけるといいと思うのですが、どうでしょうか。

○水戸教育研究所長 まさに小中学校で、いろいろな先生方が本当に悩まれていると思います。ちなみに県立の特別支援学校では、自分たちが独立した学校であるということと同時に、地域の特別支援教育センターであるという位置づけを最近持ち始めまして、要請に応じて地域でいろいろな指導をしたり、指導のアドバイスをする、そういった機能を持ち始めているところです。今、我孫子特別支援学校の話が出ましたが、既に肢体不自由を専門としている松戸特別支援学校から定期的に指導を受けている子供も市内にはいます。また千葉盲学校、千葉聾学校、本校は千葉市のほうにあるのですけれども、そのサテライト教室ということで、分校ではないのですが、柏市内にありまして、そちらに市内から通っている子供たちもいます。そういった意味で、システムとしてもそういった特別支援学校との連携というの、だんだん動き始めたタイミングなのかなというふうに思っております。

また、市内では、先生方にそういった意味でも頼っていただけるように、私どものほうに相談があれば、すぐに今出た学校のほうにもつないでいるところですので、また今後そういった戸惑いの声などが委員の皆様のお耳に入りましたら、ぜひ「研究所に相談してごらん」と言っていただけましたら、私どもからそういったところを紹介するというのも可能です。また、私ども自身のアドバイザーが直接学校に行って授業観察をした上で、こういう指導方法が適していると思うというような助言もしておりますので、そういったシステム、

研究所も含めて十分かと言われたらまだまだかもしれませんけれども、環境としても徐々に整いつつあるという方向に流れていることは間違いありませんので、もしそんな情報がありましたら、私どもの耳に入れていただけたら大変ありがたいです。よろしく願いいたします。

○北嶋委員 ありがとうございます。私たちが聞くよりは、先生方が研究所に行けばいいんだということを、市内の全ての先生方が御存じのほうがいいわけです。御存じなのかもしれませんけれども、今回は本当にそういう作業療法士のプロの手が欲しいのですということでした。その方はたまたま特別支援学級の担任でしたけれども、今クラスにそういうグレーゾーンのお子さんたちがいっぱいいらして、担任の先生がまだ20代そこそこで、先ほどおっしゃったように、そのような特別な教育を受けなくて先生になってきて、30人、40人の子供の中に何人かいる子供たちに苦勞し、その子も苦勞し、ほかの子供たちも苦勞する現実がありますよね。なので困った先生方が、困ったなという子供たちのSOSメールではありませんけれども、どこかにすぐに相談ができる先生たちのためのSOSのそういう窓口もあつたらどうかと。前に教育長のところにメールアドレスをつくってくださいましたけれども、すぐ隣に聞けばいいとか、私たちが言えば、学校内で聞けばいいでしょうと言いますけれども、現実に苦勞している先生方が、そこには聞けないけれども、ちょっと相談したいということがあるやもしれないので、そういう形も拾い上げて先生方の苦勞感を減らして、それは子供たちのためですから、そういう形も今後必要なのではないか。今は全部ネットで生きていく人が多いので、それがいい悪いではないですけれども、そこに生きていく人たちの方法を上手にすくい上げて、みんなの困り感、先生方の困り感、子供たちの困り感を減らしていくことも、これから考えていかなければいけないのかもしれないと思いますけれども、どうでしょうか。

○水戸教育研究所長 研究所に作業療法士はいませんので、私どもに言っても、そこまでのケアは受けられないのではないのかというふうに先生方が思われているのかもしれないし、そういう意味では、情報を提供できますよ、うちではなくて別のところにつなげられますよという、そういう角度での情報はもっともっと発信していかなければいけないのかなと今感じながら伺いました。その辺の情報発信の手立てなども具体的に考えてみたいと思います。

○北嶋委員 しつこくてごめんなさい。もう1回確認ですが、水戸所長がいろいろなところでお話するときには、こういう手立てがありますので、作業療法士がどうしても欲しい、そういうシステムをつくらなければならない。そのためにはどうすればいいかということも現場の先生方にお伝えしていただければ、先生方が困った困ったではなくて、自分たちでどういう形をつくろうかということにも発展するかもしれないので、いろいろな投げかけを現場の方にも水戸所長のほうからしてくださると、先生一人で抱えないで、みんなで考えるという方法があるかもしれないので、皆さんで考えてくださったらどうかなと思いますけれども。

○倉部教育長 そういうような投げかけを極力してくださいという御要望だと思いますので、よろしく申し上げます。

○豊島委員 「繫」の136号の中で小学校の新任の先生が初任者研修で、我孫子中学校の3年生の道徳の授業を参観したという報告が出ておりました。小学校の新任の先生が中学校の授業を見る。しかも3年生の道徳の授業を見るということで、ふだんは教えない中学校の授業を見ることで、小学校の新任の先生方はとても勉強になったということとか、グループワークの落ち着いた雰囲気はすばらしいとか、小学生から中学生の成長を感じることができた。まさにこれが15歳の姿なのだというふうなことで、自分たちにもこれらは参考にすることができるというようなことが書いてありました。これは非常にいいこと

だし、今までにもあったことなのだろうとっております。こういうことに賛意を表しながら、今我々は小中一貫教育、幼保小まで含めれば一貫教育をずっとやっているわけで、小学校の新任の先生方がいなくなってしまうと困ってしまうかもしれませんが、小中一貫教育のそういう現場、そういうところにみんな行ってしまおうとどうなのかわかりませんが、小中一貫教育の姿で授業をしている、中学校に行っている小学校6年生のこととか、小学生の先生が中学校に行って教えているとか、そういうところも見てもらえるといいなと。そういうことを見てもらうようなことをやっていたのかもしれませんが、私はよくわからないのですけれども。そういうところを見ていただくということを研修でやっていただいたら余計いいかなと思っております。

ただし、これは以前から皆さんと一緒に考えていることですが、こうやってくれば絶対に時間は忙しくなります。先生方の多忙感というは減っているわけでは全然ないと思いますので、そのところをあわせて、こちら側の小中一貫教育を何とかいい形でスタートしていけるようにするためには、先生方の多忙感はあるわけですので、そのところが何とかなくなっていくといいなと思っておりました。

先ほど教育長がおっしゃっていた東葛中学校は、部活動は週3日だそうです。あとは勉強云々ということです。我々中学校で週3日の部活といたら、先生方に、あるいは父兄の方に何を言われるかわかりませんが、あるいはそのぐらいしないと勉強でどうのこうのなんてなかなかできないわけですね。それを賛成するわけではないですが、そういったことを何か工夫しながら小中一貫を成功させていきたいと、絵に描いた餅で終わってしまうと泣いても泣き切れないという感じがあるものですからね。何かそのところで工夫して、少しでも時間に余裕があって、小中一貫教育の勉強ができるようにして授業ができればよりいいのだろうと、私が言うことではないですが、皆さ

んが十分に考えていらっしゃることですけれども、これを見ながらそのように思いました。おっしゃっていただければいただきたいけれども。何でも構いません。

○倉部教育長 質問の中では、「繋」の中で、小学校の新任の先生が中学校を、あるいは小中一貫の現場というものを見せてほしいという内容と、あとは思いたと思いますので、それについて。

○大島指導課長 御意見ありがとうございます。

先ほど我孫子中でのというのは、まさしく本当に初任者、今年度でいいますと小学校で19名、中学校で7名、計26名の初任者がいて、今までですと初任者の研修というものを、例えば小学校であれば、すぐれた授業をされる先生の授業を見ましようとなったときに、大概是小学校の教員の研修であれば小学校の授業を見る、中学校は中学校というのが通常だったと思うのですが、ここ数年小中一貫というものを意識して、今回は小学校の先生が我孫子中に行って、すぐれた授業を見る。また同じように11月には、今度は逆に中学校の初任者の先生が、高野山小学校だったのですけれども、そちらに行って授業を見るというふうに、いろいろな場面で小中一貫というものを意識して研修を組むようにしております。

また、あわせて来年度以降も、県の事業ですが、指導室訪問という教員が勉強する場なのですけれども、これも今まで、毎年1校、小学校で授業展開をして、そこに残りの全ての小学校の先生方が集まってやる研修があるのですけれども、今までは小中別々でやっていたものを小中を一緒にして共有していくという研修の形に変えていくというふうに工夫をしているのですけれども、そのような形でいろいろな方面というか、アイデアを出しながら、今後小中一貫が浸透していくように進めていきたいというふうに考えております。

○倉部教育長 ほかにいかがですか。——よろしいですか。

(「なし」と呼ぶ者あり)

○倉部教育長 質疑がないものと認めます。諸報告に対する質疑を打ち切ります。

○倉部教育長 以上で平成28年第11回定例教育委員会を終了いたします。どうもお疲れさまでした。

午後3時41分閉会